

神殿・仏具・墓石から川上参入 売上げの安定とトータルサポートで地域貢献

(株)よりおか [高知県宿毛市]

大工職人から神殿の名工へと転身し 石材業へも参入

四国の南西端に位置し、愛媛県と県境を接する高知県宿毛市（人口2万1,598人／年間死亡数324人／2016年1月1日現在）。温暖な気候と豊かな自然に囲まれた市域のほとんどが山岳・丘陵地帯で約84%が森林地帯からなる。

神殿^{※1}をはじめ仏壇なども取り扱う(株)よりおか（社長依岡敏治氏）の創業は1977（昭和52）年。それ以前は、東隣の土佐清水市で神社も手がける大工の棟梁をしていた。高知県では家に神殿を備えつけることが一般的だったことから、神殿の製作依頼も多く、敏治氏は独学で神殿を設えていた。独自にデザインした神殿の評判も高まり、しだいに神殿・神輿製作業にシフト。その後、宿毛市に移るとともに、仏壇販売を開始。神殿・仏壇総合展示ホール（現本社）を開設する。

バブル期は県内の新築の家のほとんどが神殿を設置していたが、大手住宅メーカーを中心とする戸建て住宅の普及とともに神殿需要が徐々

に減退。そこで、よりおかは独自のデザインを強みに、木曽檜・屋久杉・神代杉といった国産の天然材を活かした高級神殿のインターネット販売へシフトするとともに、01年に参入したのが神殿や仏壇を求めるお客様にほど近い墓石（納骨堂^{※2}）事業である。この墓石事業は、開設当初から、南海トラフ地震に備えた耐震施工や、神殿づくりで培われた意匠性の高さが評判となり、現在、よりおか石材ブランド「伝承紀」として、石材センターを有するまでに成長している。

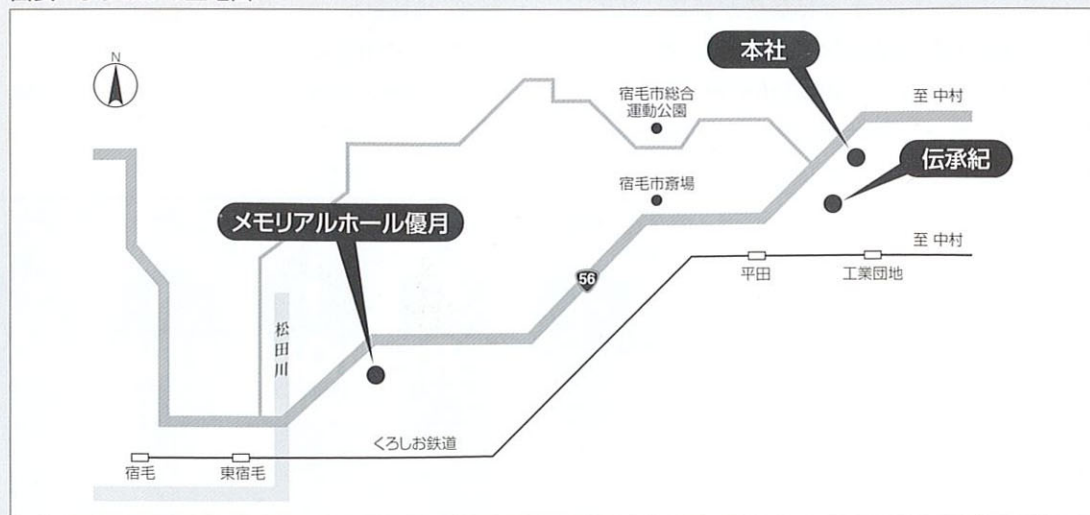
トータルサービスの提供により 地域貢献目指す

葬祭業に参入したのは、「メモリアルホール優月」が開業した2010年6月。しかし、本業が順調ななか、あえて葬祭業界に挑戦する理由は見当たらない。

この点について、同会館の責任者で常務取締役を務める依岡ゆみ氏は、「長い間、仏壇や墓石といった葬儀後の部分でお手伝いをさせていただきましたが、97年頃から葬儀も含めて供養サービス全体をサポートできるようになりたいと考えていたのです。確かに、神殿、仏壇、石材部門ともに順調に推移してきましたが、うるう年に

※1 高知県では大型の神棚を神殿という
※2 高知県では一般的な墓を納骨堂と呼ぶ慣習がある

図表 よりおかの立地図



常務取締役
依岡ゆみ氏

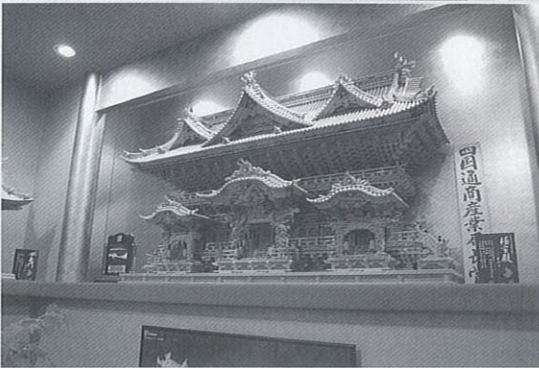


【株よりおかの概要】

【所在地】高知県宿毛市平田町戸内6280-11 (本社)
【創業】1977 (昭和52) 年
【代表者】依岡敏治
【従業員数】28人 (グループ全体)
【会館数】1 か所 (メモリアルホール優月)
【施行件数】約130件 (年間)



神殿・神輿・仏壇のよりおか本社



は少なからず影響を受けるのです。旧暦のうるう年まで気になさる方がいらっしゃれば、2年連続で売上げ予測を立てることが困難になります」と語る。

江戸時代、暦には太陰暦が使用されていた。現在、うるう年といえば1年366日と1日ふえるだけだが、太陰暦のうるう年は1か月ふえ13か月となる。諸説あるが当時、武士は年俸制だったため、うるう年には節約を兼ねて「家を建てたり墓石などの高価な品は購入しない」という風習があったという。これがいつの間にか「墓を建てるのはよくない」となったようだ。いまでこそ迷信とされているものの、こうした慣習が受け継がれている地域は少なからずあるという。

こうしたことから、同社は売上予測の立ちにくい事業に固執せず、葬儀から葬儀後のトータルサービスを提供することで地域貢献をしたいという思いから葬祭業界に参入した。

葬儀未経験者を積極採用し 優月流サービスを実践

メモリアルホール優月の見どころは、名工・

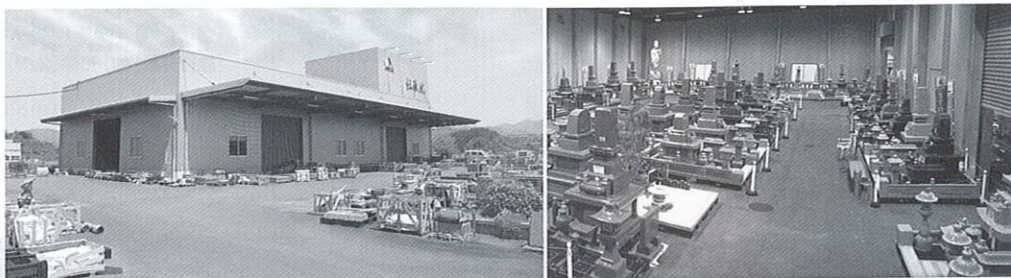
敏治社長が自ら精魂込めて作り上げた大祭壇。

「あまりにも大きな祭壇のため、会館は大祭壇に合わせて設計しました。もちろん生花のみの祭壇プランもありますが、ほとんどの方が銘木をふんだんに使った、よりおか製白木祭壇と生花の組合せを選んでくださいます」(依岡常務)

一方、館内は昔ながらのご近所づきあいや人間関係が濃密な地域性に合わせ、300人以上の社葬にも対応する大式場と、大式場を2分割した中式場 (和祭壇・洋祭壇)、洋祭壇を飾る小式場で構成する。

オープニングイベントには2日間で約1,000人が来場。生花祭壇の実演や事前相談、さらには最近の葬儀事情などのセミナーが関心を集め、無料会員制度「優月の会」への申込みも多数にのぼった。しかし、「オープンから3週間、まったく葬儀が入らずかなり焦りました」(依岡常務)

優月開業当初、同社スタッフは常務以下5人。そのほとんどが葬儀実務の未経験者だったが、すべて正社員として採用。半年ほどの研修を経てオープンに臨んだとのことだが、「よりおかの葬儀、つまり優月スタイルを築きたいと思ってい



よりおか石材ブランド「伝承紀」総合石材センター。多数の墓石（納骨堂）が展示されている



国道56号からほど近い「メモリアルホール優月」。約1年をかけて敏治社長が手づくりした大祭壇に、名工の技術が息づく



ました。選ばれる葬儀社になるには葬儀のあり方も進化しなければなりませんし、多様なニーズに柔軟に対応することが大切です。経験者だけでは、どうしても自前のやり方を変えにくい可能性が強くなってしまいます。そのため、苦勞することはわかっていましたが、未経験者を積極的に採用することで、よりおかが提案する葬儀を実践したいと思ったのです」

サービス・ブランド力を高め 地域を代表する事業者へ急躍進

優月の主たる商圏である宿毛市および隣接する大月町・三原村には、専門葬儀社、互助会が展開する6会館がひしめく。

開業当初こそ、手探りの運営が続いたものの、スタッフの成長とともに月間10～13件ほどの施行実績を重ねていく。その結果、現在、年間130件前後を施行する事業者となった。この背景には、一からつくり上げた優月流の葬儀スタイル

が地域に受け入れられたことにある。

たとえば「6年前まではこの地域では当たり前だった最後のお別れとなる釘打ちは、ご遺族にとってあまりにもつらい儀式ではないか」と思い、布棺を基本セットにし、棺の蓋を閉じるだけにした」こともその1つである。これはいまでは競合他社もこの方式を取り入れるまでになった。また、女性スタッフならではの、きめ細かいサービス提供に努めてきたことも奏功した。さらに、神殿・仏壇のよりおか、石材の伝承紀といった従来のお客様からの葬儀依頼もふえるなど、よりおかブランドの力も件数増に一役買っている。

今後も「現状に満足することなく常に新しい葬儀のあり方を模索しながら葬祭業を極めていく」と同時に、「仏壇」「墓石」とつながる供養をトータルにサポートし、「神殿」「神輿」という伝統文化を次世代に伝えることで、地域社会に貢献しつづけたらという。